【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和７年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	神埼市立神埼小学校

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

1　前年度 評価結果の概要	設定した4つの重点目標について、概ね達成できた。次年度は、 ・望ましい生活習慣の形成　・安全に関する資質、能力の育成　・特別支援教育の充実　・教職員、児童のICT利活用能力の向上 については最重点項目に位置付け、課題解決に向けて各指導部会で方策を検討する。そして、全教職員で重点目標や成果指標をより意識し、改善に向けた教育活動に取り組んでいく。
2　学校教育目標	『体を強く　心賢しく　学び合う　せんだんの子』の育成
3　本年度の重点目標	①落ち着いた学習態度を育成し、友達と関わり合いながら確かな学びの定着を目指す。 ②基本的な生活習慣を身につけさせ、健康で明るい生活態度を養う。 ③自己肯定感を高め、自分も友達も大切にすることのできる児童の育成を図る。 ④業務の効率化を図りつつ、教員の資質の向上を目指す。

4　重点取組内容・成果指標　**中間評価**　**5　最終評価**

(1)共通評価項目

重点取組			具体的な取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○学習指導における、全職員による共通理解と共通実践。 ○児童同士の関わりで学びを深める授業づくりの推進。	○学力向上対策評価シートに示した成果指標と共通指導事項「神スタイル」への取組を達成した教師90%以上。 ○百マス計算について各学年が設定した目標の達成。 ○「授業で、自分の考えを書いたり友達と伝え合ったりすることができますか」に肯定的な回答をする児童の割合80%以上。	・教職員間で毎学期共通実践を再確認するとともに、成果指標の振り返りを行う。 ・百マス計算の方法を共通理解し、発達段階、児童の実態をもとに各学年で目標や達成率を設定する。 ・「授業づくりのステップ1・2・3」を活用し観点に沿った「話し合う活動」を設定した授業づくりを推進し、年間を通して、校内研究等で取組を紹介する。 ・各教科等において「話し合う活動」の場を設定する。	A	・学力向上対策シートの共通実践や共有実践事項「神スタイル」については、90%以上の教師が取り組んでいる。しかし、読書タイムの推進については、上記に比べて取り組み意識が若干低かった。 ・百マス計算は、目達達成率にバラつきが見られた。達成率が低かった学年については、児童が意欲的に百マス計算に取り組むことができるように目標の見直しを行う。 ・授業づくりについては、国語科を中心に「話合い活動」を各学級で取り組んでいる。今後は、更に「話合い活動」を他の教科へ広げていく。	A	・学力向上対策の共通実践や共通実践事項「神スタイル」は、今回も90%以上の教師がしっかり取り組んだ。読書タイムの推進については、中間評価より、全体的に取り組み意識が若干向上したが、更なる啓発が必要である。タブレット端末を使ったデジタルドリルの宿題やスキルタイム時のデジタルドリルへの取り組みは、R9年度より、全国学力状況調査がタブレット端末を使用して実施されることから継続して取り組む必要がある。 ・百マス計算は、各学年の取組状況から1学期と比べ、個人目標を達成した児童や達成に近づいた児童が増加し、職員の取組意識の向上が見られた。 ・授業づくりは、校内研を中心に全学級で「話合い活動」を意識した授業に取り組んだ。教師の約9割が授業改善に注力した。また、「授業で自分の考えを書いたり、友達と伝え合ったりすることができている。」と回答した児童は90%であったことからも、しっかりと対話的活動に取り組んだことがわかる。	A	・どの取り組みも大変よく行われている。どの学年の子どもたちも落ち着いて学習に取り組んでおり、その姿に安心した。タブレットを活用した授業など、各学年でさまざまな工夫を凝らしながら授業づくりを進め、丁寧に指導していただいている様子がうかがえる。 ・授業の中で、ほかの子どもと話し合い、新しい意見を取り入れたり生み出したりするペア活動やグループ活動を取り入れている点は、とても良い取り組みだと思う。	〔まなび部〕 ・学力向上対策コーディネーター ・研究主任
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳や人権に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした児童85%以上	・ふれあい道徳や人権に関する取り組みについて保護者や地域に情報を発信する。 ・平和集会及び人権集会の実施	A	・全学年で「ふれあい道徳」で道徳の授業参観、平和集会を実施した。人権週間では人権集会を中心に重点的な取組を行い、学校だよりや学級通信でも人権に関する内容を伝えている。 ・人権に関する児童アンケートは、97%の児童が「学校で安心して過ごしている」、98%の児童が「自分や友達を大切にしている」と回答している。	A	・全学年で「ふれあい道徳」で道徳の授業参観を実施することができた。平和集会では、神埼市の戦争時の様子について話を聞き、自分たちの身近なところでの戦争体験から平和について考えることができた。人権週間では人権集会を中心に、「なかよし積木」を重点的な取組として行った。学校だよりや学級通信でも人権に関する内容を伝えている。 ・学校評価に関する児童アンケートで、96%の児童が「学校で安心して過ごしている」、99%の児童が「自分や友達を大切にしている」と回答している。お互いのことを思いやる気持ちや自尊感情が高まってきた。	A	・子どもたちが、生命を尊重する心や他者への思いやり、社会性、倫理観といった豊かな心を身に付けられるようにする教育活動については、実施の様子や成果からも、大変よく取り組んでいただいている。さまざまな活動を通して、子どもたちが自分や友達を大切にしながら、少しずつ自己肯定感を高めていることは、とても良い取り組みであり、今後も大切にしていって欲しい。	〔こころ部〕 ・人権・同和教育担当者 ・道徳教育推進教員
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「いじめや不登校など、子どものサインを見逃さず、子どもの心情に寄り添う指導を行っている」と回答した教職員95%以上	・年6回の「今の気持ちアンケート」の実施 ・月1回の生徒指導支援会議の実施 ・年2回（5月期、10月期）の担任教員と児童個々の「お話週間」の設定	A	・いまのきもちアンケート、いじめアンケート、おはなし習慣を計画通り実施した。 ・いじめや不登校など子供のサインを見逃さず、子どもの心情に寄り添う指導を行っていると回答した教職員は94%であった。	A	・今の気持ちアンケートやお話し週間を予定通り実施し、児童の悩みに早期対応することができた。 ・いじめや不登校など子どものサインを見逃さず、子どもの心情に寄り添う指導を行っていると答えた教職員は100%であった。いじめ、不登校ともに認知件数は微増傾向にあることから、次年度も予防的な手立ての確実な実施を図りたい。	A	・いじめの早期発見・早期対応に向けた取り組みが、計画通りにしっかりと実施されていることが、結果からも大変よく分かる。いじめ問題については積極的認知を行い、実態を早期に把握して対応しようとされており、引き続き、子どもたち一人ひとりに寄り添った丁寧な見守りと迅速な対応をお願いしたい。 ・トイレのスリッパの乱れが、子どもの荒れと関係すると聞くが、学校はきちんと指導を行っている。また、今後SNSに関するトラブルが心配である。未然に防ぐために学校の指導だけでなく、家庭の協力についてもさらに啓発していく必要がある。	〔こころ部〕 ・教育相談担当 ・教頭
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・教師が、児童のがんばりを見つけ、称賛・承認する機会をもつことを通して、児童の自己肯定感を高める。 ・キャリアパスポートを活用して学期のはじめに目標を立てさせる。学期の終わりには振り返りをし、次の学期につなげる。	A	・道徳や学活の時間を使い、児童のがんばりを見つけ称賛・承認した。「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童は92%であった。 ・各学年で学期初めや行事の前に目標をたてさせ、振り返りを行った。95%の児童が「将来の夢や目標に向かってがんばることができた」と肯定的な回答をしている。	A	・児童のがんばっているところ、よい面などを見つけ、称賛・承認した。「先生は、あなたのよいところをほめてくれますか」のアンケート項目では、約94%の児童がほめてくれたと回答している。 ・行事の都度、振り返りを行った。93%の児童が「将来の夢や目標に向かってがんばることができた」と回答しており、前向きに活動に取り組んでいることが分かる。 ・全校挙げて取り組んだ「ほめほめカード」による称賛や、「神小自慢大会」の実施も、児童の自己肯定感を高めることにつながった。	A	・先生方が子どもたちのよいところを見つけ、積極的に認めてくれていることはとても心強く思う。「ほめほめカード」や「自慢大会」など、子どもたちが自分のよさに気付き、自信をもって過ごせる環境づくりにも取り組んでいただいていることが、成果にもつながっている。	〔こころ部〕 ・生徒指導担当
	○高学年児童のリーダーシップを育てると共に、下級生の上級生へ憧れる気持ちを育て、「お互いを高め合う集団」としての集団力を高める縦割り班活動	○縦割り活動の振り返りにおいて肯定的な回答をした児童85%以上。	・縦割り掃除の実施（週2回） ・縦割り遊び（月1回）の実施	A	・縦割り掃除、縦割り遊びを計画通り実施することができた。 ・縦割り活動では、下級生の世話ができた児童が93%、友達と協力して活動できた児童が94%であり、集団力を高める活動ができている。	A	・縦割り掃除、縦割り遊びを計画通りに実施することができた。 ・縦割り活動では、下級生の世話ができたと回答した児童が95%、友達と協力して活動できたと回答した児童が95%であり、集団力を高める活動ができている。	A	・学年を越えて行う縦割り掃除や遊びを通して、子どもたちが関わり合うことはとても大切だと思う。地域としても、地域の祭りを復活させるなどの取り組みを通して、子どもたち同士が縦のつながりや横のつながりを深めながら、協力し合える関係づくりを後押ししていきたい。	〔こころ部〕 ・縦割り班活動担当
●健康・体つくり	●望ましい生活習慣の形成	○早寝、早起き、朝ご飯の徹底 ○「早寝・早起き・朝ごはんに取り組んでいる。」と回答した児童90%以上。	・「早寝・早起き・朝ごはん」を推奨する。年間2回程度、強化週間を設け、日々の生活習慣の振り返りをする。 ・保健便り、食育便りなどで、望ましい食習慣やマナーについて保護者への啓発を行う。	B	・「早寝・早起き・朝ごはんに取り組んでいる。」と回答した児童は89%であった。90%以上には達成していない。保健便り、食育便りに加え、学年や学級便りでも啓発を行う。	B	・「早寝・早起き・朝ごはんに取り組んでいる」と回答した児童は前期と同様で89%であった。保健便り、食育便りでの啓発を行ったものの、学年や学級便りで啓発を行うことが十分にできなかった。家庭と連携した取組のあり方を模索し、次年度の取組の改善につなげたい。	B	・早寝・早起き・朝ごはんといった基本的な生活習慣を身に付けることは、子どもたちにとって心身の健康保持のために大切なことである。家庭での取組であり、保護者に委ねる部分が多いため、取組率を上げるには学校との連携が重要になってくる。様々な機会に多様な方法で継続的に啓発・情報発信していくことが必要である。	〔すこやか部〕 ・体力づくり担当 ・健康指導担当 ・養護教諭
	○安全に関する資質・能力の育成	○運動場で安全に気を付けて遊ぶことができたと回答する児童90%以上。	・遊具や運動場の正しい使い方や遊び方、教室等での安全な過ごし方の継続指導を行う。 ・児童の運動場の使い方を定期的に確認し、ルールを守って安全な使用をさせ、事故予防に努める。	A	・運動場で安全に気を付けて遊ぶことができたと回答する児童は98%であった。遊具や運動場の正しい使い方や遊び方については機を見て職員で共通理解を図りながら指導をしている。	A	・「運動場で安全に気を付けて遊ぶことができた」と回答した児童は97%であった。前期よりも1%減少したが、安全に対する高い意識をもって遊んでいる。また教職員によるアンケートでも、97%が遊びのルールについて指導をしていると回答しており、安全を意識した指導を行うことができた。	A	・遊具や運動場の正しい使い方、教室での安全な過ごし方などについて、継続して丁寧に指導していただいていることが、実施結果からも分かる。今後も、子どもたちが学校生活を安全に過ごせるよう、引き続き安全意識を高める指導を続けていただきたい。	〔すこやか部〕 ・安全教育担当 ・教務
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	・業務の精選やICT活用の推進を行い、学級事務の時間を確保する。 ・定時退勤日を設定し確実に実行する。 ・毎月の業務記録をフィードバックし、個人の業務改善への意識を高める。 ・長期休業中の研修計画を工夫し、連続した年次休暇を取得しやすくする。	B	・職員の時間外在校等時間は月平均24時間17分であった。月45時間以上の職員は毎月11%ほどである。 ・毎月時間外勤務時間を示し、個人の勤務状況の振り返りを行い、取組意識の向上に努めた。 ・年次休暇の取得日数14日以上が達成できている職員は全体の30%程度であった。	A	・業務精選やICTの活用推進を行い、学級事務の時間の確保に努めた。また、定時退勤日を設定し実行を促した。これらの実践により職員の時間外在校等時間は月平均22時間5分であった。昨年度よりも1割程度短縮することができた。月45時間以上の職員は全体の9%ほどに抑えることができた。 ・年次休暇の取得日数については、14日以上の取得は30%にとどまったが、10日以上の取得率は81%に上る。次年度はさらに計画的な取得を促したい。	A	・業務の精選や ICT 活用、定時退勤日の実施など、働き方の改善に向けてしっかりと取り組まれていることが、実施結果からよく分かる。時間外在校時間が昨年度より短縮されている点は、大きな成果である。 ・年次休暇の取得も進んでおり、こうした取組が、先生方の心身の健康、子どもたちへのよりよい教育に結びつくことを期待している。	・教頭 ・各部長
	○教職員の自らの働き方の改革と心身の健康の保持への意識の向上	○「働き方改革を意識し、心身の健康の保持に努めている」と回答した教職員が85%	・メンタルヘルスに関する情報提供を行い、ラインケア、セルフケアの両面から教職員のメンタルヘルス対策を行う。 ・働き方改革や健康保持に関する研修会を実施する。	A	・教職員アンケートでは、88%が「働き方の改革を意識し、心身の健康の保持に努めている」と回答した。 ・セルフケア、ラインケアに関する情報を回覧等で周知するとともに、年休取得向上に努めた。	A	・職員はセルフケア、ラインケアの両面から心身の健康について意識して業務に取り組むことができた。教職員アンケートでは、97%が「働き方の改革を意識し、心身の健康の保持に努めている」と回答しており、自らの働き方の改革と、心身の健康の保持への意識をことができた。	A	・メンタルヘルスに関する情報提供や研修を通して、働き方改革と心身の健康保持にしっかり取り組まれていることが分かる。先生方が、自分の健康を意識しながら業務に取り組んであり、安心した。	・教頭 ・各部長
●特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育COを中心に、特別支援学級担任と交流学級担任との連携を図りながら支援体制を整え、週1回の情報共有の場を設ける。	・障害理解や合理的配慮の工夫に関する研修会を行い、専門性の向上を図る。 ・「自立活動」や「個別の指導計画の効果的な活用」等、特別支援教育に関するミニ研修を定期的に行う。 ・特別支援学級や発達障害傾向の児童との関わり方について学校全体で理解を深める。	A	・全教職員を対象に、特別支援教育に関する研修会を夏季休業中に実施した。 ・特別支援教育に関するミニ研修を行うことができた。 ・特別支援学級授業公開週間を設け、授業実践を行うとともに、特別支援学級の指導のあり方について職員全体で理解を深めた。	A	・適宜、発達障害のある児童の支援・指導方法についての研修会を行い、実践に活かすことができた。 ・職員室の特別支援学級担任の机を、担当児童の交流学級担任の近くに配置し、日々の情報交換をしやすい環境を作るなどして連携を深め、支援を必要とする児童に適切な指導を行うことができた。	A	・特別支援教育における専門性を高めるため、週1回の情報共有や研修の実施、担任同士の連携強化を図り、学校全体で児童理解や支援体制の整備に取り組まれていることが、今回の実施結果からよく分かる。支援が必要な児童が増加している状況を考えると、このような丁寧な取組は大切である。	・特別支援教育コーディネーター

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的な取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○特別支援教育の視点に立つ学級づくり	○個々の特性に応じた指導・支援の充実 ○個々が大切にされる学級風土の醸成	○毎月の子ども支援会議の実施 ○学級の実態に応じて、意識した授業や教室環境のUD化に努めたと回答する教員が90%以上 ○保護者アンケートにより「学校は子どもの良さがいかされる学級づくりに努めている」との回答90%以上	・子ども支援会議にて配慮を要する児童の状況について共通理解を図り、組織対応を充実させる。 ・専門性向上を目指した職員研修の実施。 ・学校だよりや集会を通して、児童や保護者への啓発活動を行う。	A	・計画的に子ども支援会議を実施することができた。配慮を要する児童の状況について共通理解を図り、組織対応を行うことができた。 ・教職員アンケートでは、97%が「UDを意識して教室の環境整備、個人差への配慮に取り組んだ」と回答した。 ・保護者アンケートでの「学校は子どもの良さがいかされる学級づくりに努めている」との回答は96%であった。	A	・個々の特性に応じた指導・支援の充実を図るため、配慮を要する児童について共通理解を図り、組織的に対応を行った。また、必要に応じてケース会議を行った。教職員アンケートには、すべての教員がUDを意識し、個人差への配慮に取り組んでいると回答。保護者アンケートには「学校は子どもの良さがいかされる学級づくりに努めている」と97%の回答があり、校内における指導、支援に理解が得られている。	A	・個々の特性を大切にした学級づくりに向けて、学校全体で連携しながら支援体制を整えていることが、実施結果からもよく分かる。毎月の支援会議や研修を通して特性理解が深まり、組織的な支援が着実に進んでいる様子がうかがえる。児童の特性に応じた指導・支援を充実させ、一人ひとりが大切にされる学級風土をつくろうと、丁寧に取り組んでいただいており、大変心強い。	・特別支援教育コーディネーター ・教育相談担当
○主体的な学びに向けたICT利活用	○教職員・児童のICT利活用能力の向上 ○情報モラル教育の充実	○「1人1台タブレットを週3回以上使用した」と回答する教職員・児童80%以上。 ○学年に応じた情報モラル教育やプログラミング教育の授業を実践した学級100%	・タブレット活用に関する研修会の実施。 ・学年に応じた情報モラル教育の実践。	B	・「タブレットを週3回以上使用した」と回答する教職員は69%、児童は71%であった。両者とも昨年度末に比べ使用率の高まりが見られた。 ・学年に応じた情報モラル教育やプログラミング教育の授業を実践した学級は62%であった。 ・教育情報化推進リーダーによる授業や家庭学習でのタブレット活用に関する情報共有や研修を行った。	B	・教育情報化推進リーダーによるタブレット活用に関する情報共有や研修を行い、職員のICT利活用意識や能力の向上を図ることができた。 ・学習アプリを導入し、学習内容の定着や反復学習に積極的に活用した。そのため「タブレットを週3回以上使用した」と回答した児童は75%に達した。 ・情報モラル教育の充実と、タブレットの協働的な学びへの活用が今後の課題である。	B	・昨年よりも改善が見られ、取り組みが進められていることが、実施結果からも分かる。近年は SNS やオンライン動画の「中毒性」についても指摘されており、子どもたちへの影響を心配している。学校でも情報モラル教育の一環として、適切な情報機器との関わり方について引き続き指導していただきたい。 ・家庭での使い方については、学校から保護者へ向けて、啓発や協力の呼びかけを行ったり教育講演会で啓発したりしながら、家庭と学校が連携して情報モラル教育が行えるのではないだろうか。	・情報教育推進リーダー ・教務

●…県共通　○…学校独自　◎…志と誇りを高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	本年度設定した4つの重点目標について、概ね達成できた。 次年度は、 ・学力向上の基盤となる家庭学習や家庭での読書活動の定着　・望ましい生活習慣の形成　・教職員、児童のICT利活用能力の向上と情報モラル教育やプログラミング教育の充実 について最重点項目に位置付け、課題解決に向けて各指導部会で方策を検討する。 そして、全教職員で重点目標や成果指標をより意識し、家庭や地域と連携して改善に向けた教育活動に取り組んでいく。